

詠む広場

毎日俳壇

井上 康明 選

去年今年ペン一本のおきどころ

大阪 下城かよ子

△評▽文豪が文学愛好家か、新年を迎え旧年を顧みながら、ペンをそっと机に置いたのだろう。文筆への愛着が伝わってくる。

朝刊を買ふマフラーに首つづめ

平塚市 高橋 佳代

△評▽駅のホームの売店、新聞が支える、働く人の朝のひととき。マフラーに包まれた寒気が快い。能面をはみ出す貌や月冴ゆる

去年今年大きな円の巡りくる

北本市 萩原 行博

赤土の地肌をさらし山眠る

平塚市 正好 浩

読初や岩波文庫歎異抄

藤枝市 山村 昌宏

芦屋市 水越 久哉

冬空に高所作業車反転す

神奈川 大久保 武

寒風に顔殺がれゆく大野かな

富士市 後藤 秋臣

眠る山貫いてゆくニュートリノ

東京 野上 卓

笑ひ声本堂に満ち初法話

甲斐市 松田 健嗣

片山由美子 選

バスを待つ列の寒さに加はりて

川口市 高橋さだ子

△評▽寒さに震えながらバスを待っている人たち。その最後尾に並んだのだが、「列の寒さに加はり」という表現が巧みである。

屋根裏に上つて下りて年の暮

加古川市 中村 立身

△評▽正月にしか使わないものを屋根裏にしまってあるのだろう。それを出すのが一仕事なのだ。軒低き路地に寒柝ひびきけり

廃屋にのこる表札枇杷の花

東京 徳原 伸吉

後ろ手に囲みてゐたる落葉焚

北九州市 篠原 敬祐

石投げてみても虚しき冬の海

稲沢市 永翁 明代

ぼる市や日溜まりにガジュマルの鉢

明石市 小田 慶喜

夕時雨たちまち闇となりにけり

雲南市 熱田 俊月

虎落笛即身仏の塚ありて

池田市 後藤 和豊

バス停の人それぞれの息白し

日高市 秋葉ふじ子

名古屋市 平田 秀

小川 軽舟 選

蔵頭の僧院灯るクリスマス

岡山市 三好 泥子

△評▽クリスマスでにぎわう世間とは遠くへだたった地で祝われるキリストの誕生。僧院の敬虔な暮らしが想像される。

貧乏にぬくもりありし隙間風

川越市 峰尾 雅彦

△評▽たとえあばら屋でも家族が寄り添って暮らせたぬくもりがなつかしいのだ。

縁側の茶とたくあんや冬日和

多賀城市 矢崎 英敏

煮凝りや父に捨てたる故郷あり

西尾市 金子 恵美

信女居士つづく墓標や冬の草

姫路市 賣角 稔子

ペランダにふくら雀とひとりもの

大阪市 柳原 隆一

冬薔薇や大型犬のほふほふと

松本市 上月くをるを

菊判の全集ひらく漱石忌

尼崎市 松井 博介

侘助や最後の給与明細書

大阪市 網野佐太雄

山間に差し入る朝日猊来る

八王子市 野島乃里子

西村 和子 選

着ぶくれて妻は優しくなりにけり

奈良市 上田 秋霜

△評▽若い頃はきびきび働いていた奥さん。着ぶくれの姿は年齢や丸みを表している。70代後半の作者の人生の感慨。

床を蹴るナースシューズや去年今年

南魚沼市 木村 圭

△評▽大みそかも正月も緊迫した時間が流れる病院。動きと音を具体的に描いて成功した。

冬の蝶先に来ている墓そうじ

熊本市 北原 智代

散るように風に流され冬の蝶

浜松市 尾内甲太郎

冬かまきり睨み返して動かざり

明石市 増田 良子

鯛焼を買って帰れば妻の留守

千葉市 笹沼 郁夫

鮫鱈鍋太平洋へ日が沈む

下妻市 神郡 貢

山門の扁額いぶす杉焚火

神奈川 新井たか志

レシートも葉の一つ古日記

前橋市 松本 潤

バス停の数字まばらに探梅行

さいたま市 根岸 青子



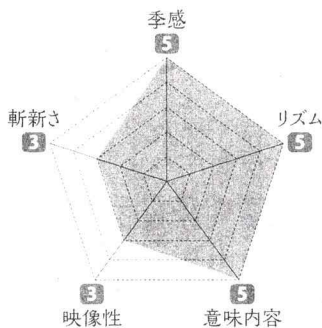
注目の一句

塩見恵介

大谷に藤井にわいてひなたぼこ

セツ子

チャートで採点



米大リーグの大谷翔平選手と将棋の藤井聡太8冠のことか。若武者の活躍に市井の人の気楽なひなたぼこ談義が花開くくつろぎの一句。昨今ではSNSやネットニュースのコメントなどでさまざまなジャンルに対して盛んに見識を披瀝する人が目に付くが、正直うんざりするものが多い。ひなたぼこのような場所なら、やや無責任なものほど明るい笑いを呼ぶだろう。

それにしても俳句に唐突に入り込む人名は面白い。掲句は有名人だが、存外無名の人気が愉快だ。取り合わせる季語などを手がかりに、その人物の性情を表現できる楽しさで、私も近年、意識的に詠んでいる。△コンピニのレジはクワンさん小望月▽

(しおみ・けいすけ)俳人

アプリ 俳句でふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 毎日新聞社は富士五湖や耶馬溪など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。



アプリのダウンロードはこちら